

白糠の アイヌ語地名

第10回

○恋問(コイトイ)

「コイトイ」は、「コイ(波)・ドイエ(崩れる・壊れる)」というアイヌ語で「打ち寄せる波が砂丘を崩し(陸地を壊して)、川や沼に流れ込む」と訳されています。漢字の「恋問」のイメージとはずいぶん違った由来です。

この地名は全道各地にあり、地名辞典では標津町や新ひだか町三石、稚内市や苫小牧市が紹介されています。



国道38号から見たコイトイ川

いずれも「波が崩す」とか「波が越える」と言う意味で、川の下流のようすから名前がついたものです。

アイヌ語地名研究者の山田秀三は、「どこも川の下流が海岸砂丘の後を横流している処で、海波が荒い時に、その砂丘を破って川に打ち込む処から呼ばれた名である。」と説明しています。(『北海道の地名』より)

◆コイトイにまつわるアイヌ伝説

①コイトイ沼のカムイ・イウ

庶路のコイトイ沼は、ウグイ、フナなどの魚もたくさんいたし、周囲の山はウバユリやキトピロも多かったため、庶路は住みよい平和なコタンとしてアイヌ仲間でもうらやましがられていた。昔、コタンにたいへん上手にド

ス(占い)をするばあさんがあった。

どうしたことか、ある晩、このばあさんが急に白髪を振り乱して「オレプウンペ エク(津波が来る)」とコタンの中を連呼して走り回った。コタンの人たちは、はじめ気にもかけなかったが、ばあさんは「早く逃げないと皆死ぬぞ」とますます大声で家々の戸をたたいてまわったので、みんな気が悪くなり裏山に逃れた。

すると間もなく沖の方が盛り上がり、あれよあれよといううちに山のような大波が押し寄せてきて、すべてをさらっていった。

人々は「ばあさんのおかげで助かった」と喜び合った。しかし、ばあさんの姿はそれつきり見たものがなかった。

後でわかったのだが、沼の奥の谷にひとつの大岩が立っていた。これは、あのドスばあさんがなったのに違いないと、イナウ(木幣)をあけて、カムイ・イウ(神岩)と言って祭った。

②コイトイ沼の主

昔、コイトイ沼は無名で、ただ「トー(沼)」と言っていた。この沼は不思議なことに、いろいろな種類の魚がたくさんいても、



コイトイ沼周辺の様子

フナがすんでいないのである。

昔、チライ(イトウ)の子が、コイトイ川をさかのぼって、しまいに沼に入ってしまったからさあたいへん。この沼はフナがたくさんいて、チライの子はさんざん痛めつけられて、半死半生になって、流れて海にもどった。

これを見た親チライは憤慨して、仲間をおおげい連れて行ってフナを皆殺しにしてしまった。そして親チライはとどまって主になった。それでフナは今もすめないのだと言う。

(2題の伝説とも、庶路神の沢芦名ヨシ談/市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」(佐藤直太郎)から引用)